

郷土館だより

Vol. 18, No.3

1996. 3. 31



(写真解説)

写真の寺子屋風景は幕末の文人画絵師、渡辺華山が描いた『一掃百態』(明治十七年六月、愛知県渥美郡田原村・渡辺階による出版、原本郷土館蔵)の中の一枚です。このほかにさまざまな人物の風俗所作が達筆に生き生きと描かれています。

江戸時代の寺子屋風景

現在のような学校制度ができ、すべての子供が教育を受けられるようになったのは明治に入ってからのことです。学校はずっと昔からあったように思われますが、その歴史はたかだか120年でしかありません。それでは江戸時代の子どもたちは何処で、どのように勉強していたのでしょうか。

三島には江戸の中頃に宿場内に初めて庶民教育の施設が設けられました。以来、明治になるまで、一地方の町としては異例なほど多くの施設が設けられたといわれています。それらの多くは設置者の名前をとって〇〇塾と称されたようです。設置者といっても、それは学識のある武家や僧侶、神官、医者などの一庶民で、自らが師匠となって教鞭をとっていた私塾でした。

このような民間による庶民教育の施設を一

般には「寺子屋」とか「手習所」といいます。寺子屋での学習には教科、学科のような判然とした学習内容はなく、いわゆる「読み・書き・そろばん」という社会生活のための基礎知識を学ぶことが主とされました。

さて、寺子屋での学習風景はどのようなものだったのでしょうか。江戸時代の寺子屋での子どもたちと先生の様子を描いた絵がありましたので中を覗いてみましょう。

先生の前で書物を読んで評価をうかがう子供と順番を待っている子供がいるかと思えば、目の届かないところでは手習いに飽きてしまって取っ組み合いをするやら、頬づえをついて筆をくわえたり、大あくびをしたり、さまざまな子供がいます。いつの時代も変わらぬ教室風景です。

企画展「三島の近世の教育」

～並河五一・秋山富南・吉原守拙を中心に～

会期 平成8年3月17日(日)～5月12日(日)

会場 三島市郷土館 一階 展示室

江戸時代の三島宿は、五大宿場町のひとつとして繁栄しました。また、伊豆東駿地域の経済・文化・教育の中心でもありました。伊豆の教育施設としては葦山江川代官家に設けられた葦山塾が有名で幕末江川英龍の頃には全国から、優秀な人材が砲術・洋学等を学びに集まっています。

一方、庶民の教育は、初等教育（読み・書き・そろばん）を教える寺子屋・家塾が、三島宿及び、周辺の集落に散在し、数人から数十人程度の子供達が通っていました。これは一人の師が、1人1人子供に合わせた、教材を与え、自習させるもので、今のような教室での一斉教育とは異なり、教場内は大そらぎやかなものだったようです。

こうした寺子屋は現在判明しているだけでも三島に数か所ありました（表参照）

又、初等教育を終えた子弟を教育する漢学塾も並河五一（誠所）の「仰止館」、秋山富南の「秋山塾」、福井雪水の「千之塾」など海道にその名を知られた塾もあり、地域で活躍する多くの人材を育てています。

三島の教育の特徴の一つは地理学への志向と、出版活動といえるのでしょう。その種を蒔いた並河五一の『五畿内志』や、五一の弟子秋山富南の『豆州志稿』の編さんは、現在まで高い評価を受けています。また、明治初期は、三島の出版活動が最も盛んな時期でした。吉原呼我・渡辺輝寿等は教材図書の執筆・出版に尽力しています。教育者は学識を備えた人格者として、篤い尊敬を受けていました。

今回の企画展では多くの教育者の中から、後世に影響を及ぼした並河誠所・秋山富南・吉原守拙を中心に上げ、その他の教育者の資料も展示解説しました。

教育の持つ意味が、現在よりもっと生活に密着し切実で、師弟の絆も強かった当時を振り返り、三島の近代教育の原点を考えていただけたらと思います。

三島の庶民教育施設（漢学塾と寺子屋）

塾・寺子屋	開設者	開設年代	開設場所
河合塾	河合春節	正徳・享保頃	社家村(大宮町)
仰止館	並河五一 (誠所)	享保9(1724) ～宝暦2(1752)	三島宿北口
荻田塾	荻田壽白	～享保15(1730)	三島宿
秋山塾	秋山富南	安永・天明頃	安久
弥佐川塾	弥佐川東朔	寛政6(1794) ～文化6(1809)	三島宿
横山塾	横山玄与	文化・文政頃	三島宿裏町
千之塾	福井雪水	天保9(1838)～ 明治元頃(1868)	長谷街
後素義塾	箕田寿平	安政頃 ～明治6(1873)	八反畑
旭家塾	旭昇	～明治6(1873)	大場中島
榊家塾	榊家	江戸末 ～明治6(1873)	平田
正心舎	三枝敬之	元治元頃(1864) ～明治7(1874)	加屋町
千之社	福井良輔	～明治7(1874)	長谷
聿修舎	間宮徳兵衛	～明治7(1874)	市ヶ原
守静塾	渡辺輝壽	明治2(1869) ～明治6(1873)	谷田
斎藤塾	斎藤藤助	明治3(1870) ～明治5(1872)	世古本陣一 農兵稽古所 (市役所)
開心庵舎	吉原守拙他	明治4年5月～ (1871)	問屋場奥 (中央町別館)

三島の教育者群像

ここでは、今回の企画展パンフレットであまり触れられなかった、三島にとって重要な教育者3人を紹介します。

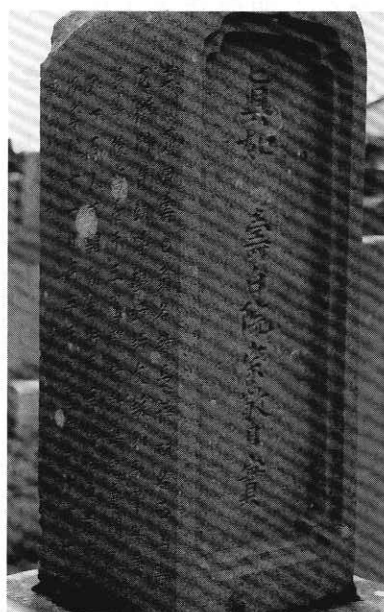
刈田 寿白

(墓地 大社町本妙寺)

現在判明している中で三島で最も古くから塾を開き、子弟を育成した教育者です。

墓誌によると、武蔵国に寛文の頃(1670前後)誕生し、諱を長清、初名は西山勘左衛門といいました。詩文を好み、和歌を詠じ、書に長じた文化人でした。後に三島宿に住むようになると、100人ほどの児童や門人の教育にあたっています。享保15年(1730)秋、61才で病没しました。

墓の左側には師の死を嘆く門人達による漢詩が刻まれ、学識・人格共に秀れ、門人達に慕われていた生前の様子をしのぶことができます。



刈田寿白の墓

福井 雪水

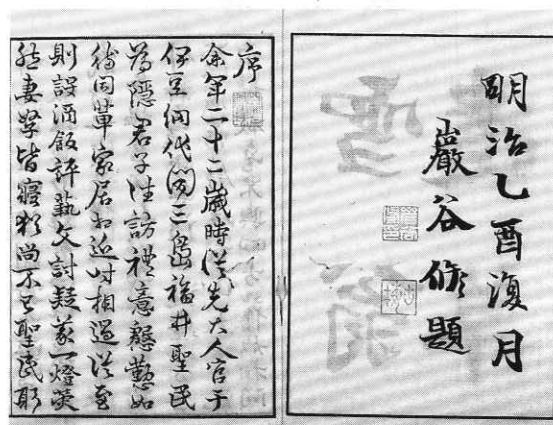
(墓地 日の出町妙行寺)

幕末の三島宿で、俊才を多く育てた教育者です。

雪水は、文化11年(1814)、三島宿の長谷街で、越後屋久蔵(維親)の子として生まれ、横山玄与に就いて学びました。後に江戸に出て、朝川善庵の門に入り、学業を進めます。天保9年(1838)25才の時、三島へ帰り長谷街の自宅で漢学塾「千之塾」を開きました。遠近にその名声が聞こえ、教えを願う門人達で堂内満員だったといわれます。また葦山代官江川氏の求めに応じ史籍を講じています。雪水は沈静寡言の人でしたが、質問があれば微細に説き、経書の講義は談論風発、学ぶ者皆傾聴したといわれます。

諸藩は争って雪水を招聘しましたが決して応ずることはなく、30年にわたり清貧に安じました。明治の初め頃塾は閉鎖され、明治3年(1870)門人箕田寿平の八反畑の寓居にて57才で逝去しました。

門人には、衆議院議員田中翼・同大村和吉郎、葦山校長山口余一、医学博士宇野朗、他明治に活躍する人材が多く巣だちました。



「雪翁遺草」

旭昇と旭塾

三島市中島にある旭家は中島左内神社の宮司を代々勤め修験者（法印さん）の家でした。14代当主旭昇は、宮司のかたわら、子弟の育成につとめ、四書五教等を並べた本棚を背に、教育にたずさわったといわれます。

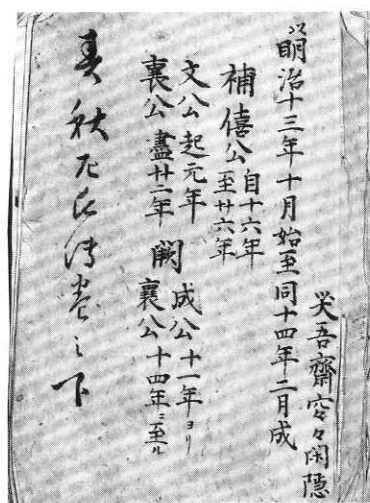
明治の初期に最も隆盛を極め、常に100人内外の子弟が通学し、遠く函南柏谷・畑毛・平井・上沢・三島二日町・宮倉からも通っていました。育てた門弟は300人を越え、明治に活躍する優秀な人材を多く育てました。

塾の教育の一端を伺うことができるのが、次男隆之輔が15才の時に書写した「春秋左氏伝」です。500点余りの漢籍を端整な細字で隣書してあり、頭註も細密に写しています。手本・教科書の数が限られているためもありますが、漢文の学習は素読と共に書写して覚えるという、当時の厳しい教育の姿勢が伺えます。

明治6年中郷学校設立と共に塾は閉鎖されましたが漢文・薬草学の教育は細々と引き続き、妻美和と共につづけられたといえます。

明治8年旭昇は50才で病死し、旭家代々の当主の眠る覚王院塚（東大場西北の丘陵）に葬られます。この時門弟（筆子）達が墓を建てています。

明治24年9月には、門弟35人がはかり墓の側に碑を建て顕彰しました。文は秋山光条によるものです。



「春秋左氏伝」



旭昇之墓

かみかぜ 習字手本「賀美風」

(本文)

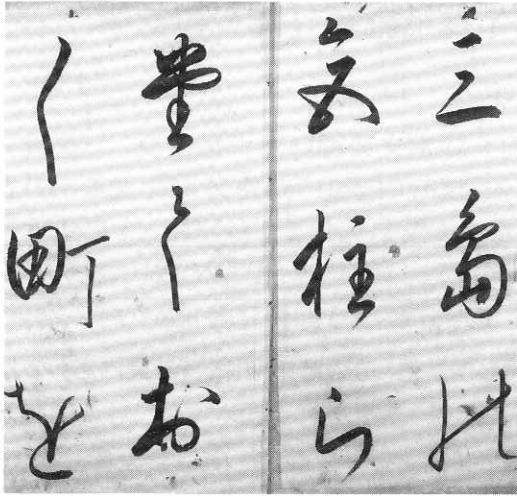
神風や伊豆の三島能宮柱ら堂天おく町
 を加そふ連ハ先ミや本の傳馬丁祭り盤
 西能市ケ原後のまつ里越合天や月二町
 とハ申羅ん御宝入る宮倉や祈れ盤加の
 ふ金谷丁野邊ハ菜種尔長谷町扱天新町
 者い可ならん視盤窪き久保丁や唐人町
 の笛農古へ扱茂田町尔鳴く蛙き久も涼
 し幾竹林寺故や水無月の祓所とわ春登
 知るき裏町や問屋小路の加し可ま志柴
 折くへ類芝丁屋佐天大小の仲島を
 春具禮者爰尔廣小路穂並茂那良婦六反
 田連行駒の蓮行寺茶町木町をうち過
 天賤可家并婦茅町や楚能名も四方丹轟天
 千貫樋曾加く連奈幾

企画展「米作りのくらし」 (終了報告)

開 催 平成7年11月19日(日)
～平成8年1月28日(日)

会 場 郷土館 一階 展示室

入館者数 13,199人



手本「賀美風」(関守敏氏所蔵)

前ページの習字手本「賀美風」は、

幕末頃三島宿二日町に住んでいた柏屋定五郎が持っていたものです。

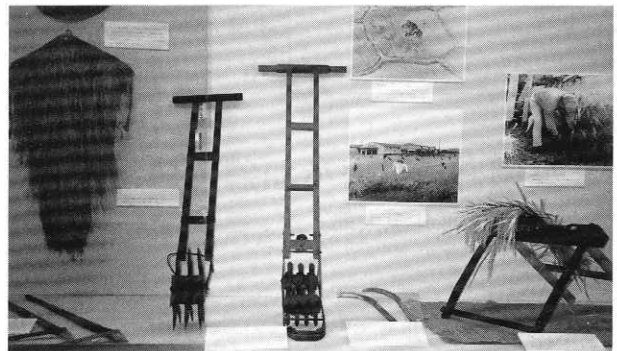
これは文字を習い始めたばかりの子供向けの手本で、228文字の中に平仮名・変体仮名・最少限の漢字が盛り込まれています。その上三島の地名づくしとなっており、三島宿の風情が五七調で詠み込まれています。日常生活に欠かせない文字と地名を一緒に修得させるもので、三島における寺子屋教育の一端が伺えます。

近年の約30年間で大きく変化した日本の米作りを「昔の米作り」と「現在の米作り」で対比展示しました。

使い込まれた農具からは2000年にわたり、「米作り」の必要性から育まれた日本人の伝統的生活や勤労意欲と共同体(ムラ)意識を見ることができます。

しかし、年配の方にはなつかしい唐箕・千歯・田ころがしなどの農具は、今の若者・子供にとってわけのわからない道具でしかありません。ここ1～2世代の間に、日々の生活習慣・価値観が大きく変化しました。

展示室でおじいさんが小学生の孫達に「この道具は…」などと説明するのを聞くにつけ、日本人が伝統的生活からどんどん遠くに行ってしまったこと、「米作り」に替わり、何を精神的基盤としていくのか考えてしまいました。



農具の展示風景

平成8年度郷土館企画展予定のお知らせ

三島市郷土館では平成8年度の企画展示を下記の表のとおり計画しております。

多数の皆様のご来館をお待ちしております。

企画展示

テ ー マ	期 間 予 定	展 示 内 容
①企画展 「三島の近世の教育」 ～並河誠所・秋山富南・ 吉原守拙を中心に～	平成8年3月17日 ～5月12日	並河誠所と漢学塾、その師弟関係、『五畿内志』などの 研究書の展示 秋山富南とその業績『豆州志稿』『南方海島志』など、 他筆跡 吉原守拙と最初の三島官立学校、吉原親子と三島 明治期三島の学校と教育（バラ女学校、ほか）
②企画展 「三島の山の祭り・ 里の祭り」 ～竜爪さんと天王さん～	平成8年7月中旬 ～9月中旬	(1) 箱根西麓地区や周辺の山地に広がる 「竜爪さんの祭り」 (2) 中郷地区をはじめとした周辺の里に広がる 「天王さんの祭り」 (3) それぞれの祭りの特徴
③企画展 三島のあけぼのⅣ 「東海道と三島代官所」	平成8年11月上旬 、 平成9年1月上旬	(1) 近世の街道（石畳道を中心に） (2) 近世の三島宿 (3) 三島代官所 (4) そのほか
④企画展 「農兵節と平井源太郎」	平成9年3月中旬 ～5月上旬	(1) 農兵節の曲と歌詞のルーツ (2) 農兵節と平井源太郎 平井源太郎伝 農兵節のレコード化 農兵節にかける熱意

■郷土館出版物販売のお知らせ

「中空の日記」解説が終了し、このたび刊行販売いたしました。

本資料集は、郷土館所蔵の勝俣文庫の一冊、江戸時代の歌人香川景樹の「中空の日記」を解説したものです。内容は、景樹が江戸から津島までの東海道の旅で、ところどころに和歌を挿入しつつ、美しい文章で構成した歌日記です。

景樹は、明和五年（一七六八）因幡国鳥取藩士の荒井小三次の二男として生まれています。幼くしてよく文を読み、書を写し、七歳の年には師について和歌を学び始めたと伝えられます。二十六歳で京都に出、香川景柄の養子になり、以来香川の姓を名乗ります。景樹六十歳の年には頼山陽が門下生になるなど、名声は高まり、円熟期を迎えます。代表歌集「桂園一枝」が刊行されたのもこの頃です。天保十四年（一八四三）景樹は七十六歳の生涯を閉じましたが、彼の歌風は桂園派の門人たちに引き継がれ、当時の和歌世界の主流を占め、明治以降の御歌所和歌の源流を形成します。

景樹が出した歌集の一冊、それが「中空の日記」（天保三年、京都・河南儀兵衛刊）でした。日記は文政元年の秋「神無月二十三日」に江戸を出発するところから始まります。

東海道を順調に上り、三島に到着したのは十一月七日のことでした。さっそく景樹は三島の社（現在の三嶋大社）に詣で二首を詠じました。「散かかる いてふの一葉 袖にうけて やがてもぬさと 手むけまつらん」

「ひとの親の ここの杜の 木がらしは 身をわけて吹く こち社すれ」

また、三島暦を買い求めての感想は次のようでした。

「此さとに三島暦とて、世に名高くものせるは、ことなるふしもやあらんずらんと、かひもとめて見るに、ただ一とちの冊子にて、そのさまのみぞかへれる」

世に名高い三島暦だから、ほかの暦（景樹の場合京暦）とはどこか内容が変わったところでもあるのではないかと買っては見たが、ふつうの一綴りの暦で、形態のみが少し変わっただけであった、と少し落胆しています。そして、

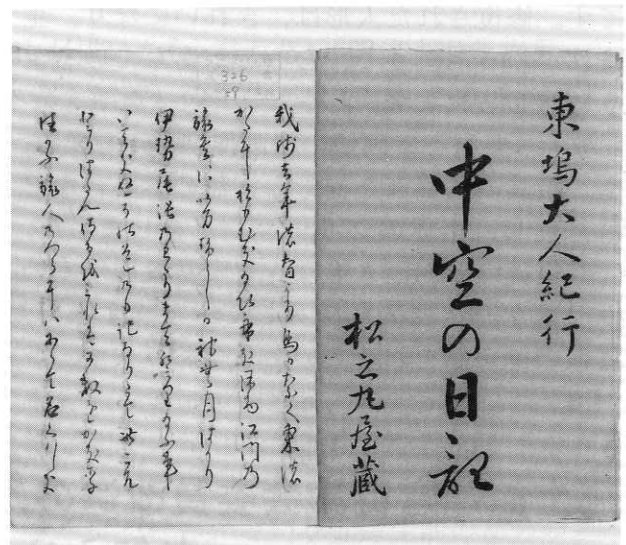
また一首。

「はかなしや 五十あまりの 年月も 夢と三島の 暦なりけり」

景樹はやがて来る春に期待を寄せることがあったでしょう。しかし、三島暦には、彼が期待するような新しい内容は見つからなかったのです。それもそのはずです。当時の暦は江戸も京都も三島も同じ内容で統一されていたからです。

こうして、景樹が津島に到着したのは、文政元年の師走一日のことでした。

解説及び校正には「三島古文書読習会」の皆様があたりました。同会のご協力に対して厚く感謝申し上げます。



中空の日記

「浮世絵三島絵はがき」再刊販売

郷土館では、このたび好評につき既に完売となり、在庫の無くなった「浮世絵三島絵はがき」のシリーズの(1)、(2)の中から4枚を選び再刊販売することといたしました。

市民・観光客の皆様の希望も多く、「三島の歴史」を知るうえでもお役に立つものと思います。

この絵はがきは、郷土館事務室受付で4枚1組100円で販売いたしております。

郷土館収蔵品「三四呂人形」 及び絵画 「英国風景」の修復完了

郷土館では、2階の常設展示室に1つのコーナーを設けて、ガラスケースの中に展示してある野口三四郎作「三島市指定文化財 三四呂人形」を昨年度にひきつづき修復しました。

修復が完了した作品は、「てるてる坊主」「羽子板」「子守り」「つばめ」の4作品です。

これらの三四呂人形は、製作されてから、既に50年以上も経ているため、欠損部ができたり人形顔面部分や頭部に異物が附着したり、変色してきたため、これらの傷みを放置しておく、大事な市の文化財がとにかえしのつかないことになる恐れがでてきました。

それを防ぐようにこの時点で修復したものです。修復された人形は、きれいになり、生まれかわったようで、心なしか喜んでいるように感じられます。

また、栗原忠二画伯の絵画作品「英国風景」も、絵具の欠損部を補彩し、額の不具合なども修理し、全体のクリーニングをしました。

修復後の三四呂人形は、2階常設展示室のガラスケースに入れ陳列してありますので、皆様の御来館をお待ちいたしております。

郷土館運営協議会委員改選のお知らせ

郷土館の円滑な運営を図るため、郷土館運営協議会が設けられています。

このたび、二年間の任期が満了したことに伴い、委員が改選されました。新しく委員を委嘱した方々は、次のとおりです。貴重な助言・意見をお願いいたします。

任期 平成7年12月1日～平成9年11月30日（五十音順）

番号	氏名	住 所
1	秋津 亘	三島市南本町17-14
2	秋山直樹	三島市初音台5-1
3	池谷節子	三島市徳倉734-9
4	迫田信行	田方郡菰山町中1254
5	重山芳計	三島市清住町3-25
6	鈴木辰己	三島市夏梅木872
7	諏訪部敏之	三島市緑町9-25
8	中山久子	三島市芝本町11-26
9	西川惣三	三島市寿町9-33
10	藤巻哲雄	三島市千枚原2-2
11	槇 茂彦	田方郡菰山町寺家28
12	山岡修一	三島市文教町1-11-9

利用案内

休館日 毎週月曜（祝日の時は翌日）
12月27日～1月2日
開館時間 午前9時～午後5時00分（10/31まで）
入場無料（但し、楽寿園入場の際、有料）



三島駅（南口）から徒歩5分。市立公園楽寿園内

郷土館だより No.54

平成8年3月31日発行

（年3回発行）

編集 三島市郷土館

住所 〒411 三島市一番町19-3 楽寿園内

TEL 0559-71-8228

FAX 0559-81-3730

発行 三島市教育委員会